



* イフパット だより *

～農民参加なくして農業なし～

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大と 青年海外協力隊員 ーコスタリカでの活動そして避難帰国ー

イフパット研究員 錦織 紀子

青年海外協力隊を志望し、イフパットに入り、働きながら生活改善について学んできた私ですが、昨年1月よりコスタリカで念願のコミュニティ開発隊員としての活動がスタートしました。そこから今年の3月に、新型コロナウイルスの影響で緊急帰国するまでの私の活動について、ここで書かせていただきます。

2019年1月28日にコスタリカへ入国し5週間の現地訓練を行った後、任地に赴任したのは3月4日のことでした。（任地の状況などは、2019年8月1日発行のイフパットだより22特大号に記載しておりますので、そちらを読んでいただくと嬉しいです）私が配属されたのは農村開発庁のパケラ事務所で、配属先のメンバーは6人と少人数のアットホームな職場でした。要請内容は2つあり、1つは地域の環境問題に取り組むことで、事務所がブルーフラッグという環境認証を取得・維持すること、もう1つは生活改善活動の実施支援でした。

環境問題に取り組む活動では、地域の他機関と連携し、月に一回ビーチを清掃しました。街の中心道路を花木で埋め尽くそうと植林に参加し、小学生に向けた環境キャンプの支援や、現地の材料での高倉コンポスト試作と事務所でのコンポスト活用、またコンポスト普及に向けての準備も始めました。同僚と事務所内のゴミの量や、消費エネルギー量を記録して、月次会議で前年比を提示し、節約を呼びかけたりもしました。そして環境認証を取得すべく書類を揃え申請し、今年の6月に結果が発表され、ブルーフラッグ2つ星を取得しました。星の取得が、私のボランティア活動の指標となっていたので、ひとまず安心しました。今年は綺麗なビーチで観光客を増やす目的で、ビーチの清掃活動の範囲を広げ、住民も巻き込んで定期的に清掃する計画を進めていました。

生活改善の活動では、ファシリテーターとして既存の生活改善グループへの寄り添い活動や、新規グループ結成に向けたワークショップを行いました。ある既存グループの寄り添い活動の中で、ファシリテーター側が活動を提案し、グループ員が自分で課題や活動を考えられるようなプロセスを取り入れていないように感じたので、ファシリテーター間で話し合い、住民グループの同意を得て、生活改善活動とは何かを振り返りながら住民自身で活動計画を立てるワークショップを行いました。

任地には、生活改善普及に関心のある機関が連携して結成した生活改善ファシリテーターチームがあり、メンバーには生活改善に関する様々な経験を持った人材が集まっていました。皆、参加型開発に係るツールを使いこなし、生活改善についての知識も持っていたので、言葉が片言の私に何ができるのか、出る幕がないと悩んだこともありました。

しかし、どんなに素晴らしい人材が揃っていても、うまくいっていないことはあったので、何か私にできることはないか、そして改善できるポイントがないかと探していきました。そこで見てきたのが、チーム内では良いところは褒め合うけれど、間違いについて話すことがないので、生活改善について誤った方向に進むファシリテーターがいても指摘する人はおらず、そのままになっていました。

コスタリカの文化なのかもしれませんが、人に指摘することやネガティブな発言は敬遠されており、現地協力隊の先輩からも任地で活動する際は、相手のプライドを傷つけないよう細心の注意が必要とアドバイスをもらっていたので、そんな中どうやって皆で意見を交換できるか考えた末、指摘するのではなく、みんなで意見を話せる場を作り、その中で生活改善の基本理念を話し合えば、一人一

（写真）生活改善グループ員の自宅で行われたクリスマス会にて 2019年12月：JOCVコスタリカ隊員 錦織紀子

**NPO便り第25号に寄せて
（コロナ禍のイフパット）** 新型コロナウイルス感染症拡大を受け、海外との関連業務の多いイフパットも大きな影響を受けています。青年海外協力隊員の緊急帰国、JICA本邦研修はリモート研修に変更されました。イフパットが本年度開始予定していた二つの草の根技術協力案件（ベトナム及びエルサルバドル）も開始は2021年にずれ込み、現地への人の派遣は2021年4月以降になると聞いています。

イフパットの活動の多くが一時中断される中、「イフパット便り」の原稿集めも苦慮していました。今般、会員各位に広く原稿を募集し、おかげさまで25号の発刊にこぎ着けることができました。投稿ありがとうございます。

編集文責：永井 和夫

目次

・P1 新型コロナウイルス感染症の世界的拡大と青年海外協力隊員 錦織 紀子

・P2 南米3カ国・技術移転雑感 匠原 監一郎

・P3 国際協力から、新たな道へ 渡辺 雅夫

人の考えも定まってくるのではないかと考えました。ファシリテーターチームの全体会議で活動方針などは話し合っていました。が、細かいやり方やファシリテーターとしての在り方を話し合う場を新たに持つため、活動前にはまず現場担当者で打ち合わせをするようにしました。

実は今まで現場担当者間での打ち合わせをほぼしていなかったのには理由があり、どこにでもあるような人間関係の問題が存在していました。しかし現地ファシリテーター間でのコミュニケーションが改善しないまま、グループ員との活動を行っても、方針が定まらないチグハグした活動になっていたため、ダメ元で外国人の私が呼びかけ、打ち合わせを行うようにしてみました。

その結果、中には嫌々ながらの職員もいましたが、担当者が集まってくれたので、活動前にはファシリテーションの目的や方向性を話し合い、みんなで意見のすり合わせを行い、どんなファシリテーションをすれば、グループ員の主体性を育むことができるのか、毎回みんなで考えることができました。

また2020年の予定として新規グループの立ち上げを計画し、今までは担当ファシリテーターを決め、数人の担当者が中心となって導入ワークショップを行っていましたが、今回はファシリテーターチーム全員が一丸となって導入ワークショップを行い、お互いの知識を共有し、チームのファシリテーション能力強化を図ることが決まり、3月には第一回目の導入ワークショップを開催しました。開催から10日後に緊急帰国が決まり、第二回目に参加することなく、私はコスタリカを離れることになりました。

今少しずつ規制は緩和されていますが、現地は未だグループの活動が再開できていない状況です。

着任してから緊急帰国まで1年と2週間の間、活動は順調だったとは言えず、着任早々参加した新規グループの立ち上げが上手くいかなかったり、既存グループの自主的な活動へのやる気を引き出せなかったりと悩みは尽きず、でも明るく前向きな仲間のおかげでなんとかやっている状態でした。2年目の計画では住民へのインタビューを予定し、住民一人一人が行ってきた活動について、じっくり話が聞けるのを楽しみにしていたので、やり残したことが沢山あり過ぎ今回の緊急帰国から契約解除は私にとって残念で仕方ありません。しかし有難いことに、向こう3年間状況が整えば、再派遣される特別登録制度という措置が取られたので、仕事に復帰して働きながら、再派遣に向けて機を待っています。

1日も早く状況が良くなり、コスタリカの仲間と笑顔で再会できる日を心待ちにしています。

南米3カ国・技術移転雑感

イフパット技術顧問 匠原 監一郎

(社)植物防疫協会研究所(牛久市)に在任中の1980年代初頭、某柑橘園で温州ミカンの極早生品種にトラミカンと称するウイルス病が発生した。柑橘類は接木によって品種更新されるので、保毒した穂木が(闇)取引されて神奈

川県以西の柑橘園に本病が広がり始めた。緊急防除のためにウイルス診断用の抗体が必要となり、協会は国の補助で抗血清作製施設を建て、抗体を都府県の試験場に配布する事業を開始した。筆者はウイルス研究室長としてこれに従事し、数年内にウイルスの拡大が阻止された。1990年にJICAから南米パラグアイに関する二つの課題と専門家の派遣要請があり、私が行くことになった。

1. パラグアイ共和国(パ国)：課題は、①パ国のトマト圃場でウイルス病らしい病気(ヴィラカベサ病；VC=黄化えそ病)が大発生し、壊滅的な被害が出たので調査と防除法の策定。②国立アスンシオン大学(ア大)で、農学部植物病理学科の先生達に対する作物保護学教授法の指導と国内農作物の病(虫)害の発生調査、であった。



(写真)アスンシオン大学農学部植物病理学科

カウンターパート(CP)は学科の主任教授以下3名で2名は英語が話せた。研究室に拠点を置いて講義や学生実験の実情調査から始めた。スペイン語は解らなかったが、作物保護学の講義は教科書どおりで内容はひと昔前のままであった。学会誌等の入手が困難ではやむを得ない。実験室には光学顕微鏡と簡易な無菌室と滅菌器があるが、経常研究費が無いので試薬が買えず、教授が自費で購入していた。学生実験は病原菌の培養と顕微鏡観察による同定であった。改善点を提言したかったが、当初は気の毒で言い出せなかった。ウイルス病診断用に抗血清を持参したが、血清試験ができる状況ではなかった。医学部の保健科学研究所にはJICAが供与した電子顕微鏡(EM)があった。当時は「シャーガス病プロジェクト」が進行中で、リーダーの好意でEMが使えることになって安堵した。パ国初の植物ウイルス(TMVやCiTV)の電顕像を撮り、CPや学部長から喜ばれた。CPと共に黄化えそ病その他の病害調査には頻繁に出かけ、ほぼ全土を巡った。アザミウマが媒介するVCの激発に接して感激(?)した。柑橘や大豆、トマト等の農作物から病徴診断も含めて20余種類の病気が特定できた。2年目にはJICAのパ国事務所から視聴覚機材やエアコン等が病理学科に供与され、作業が楽になって職員一同から大いに感謝された。調査や実験などで楽しく3年間を過ごし、大学は客員教授にしてくれた。任期を終えて元の研究所に帰り、前述の事業を継続した。

2. アルゼンチン共和国(ア国)：1995年頃、農水省中央農研(現農研機構)がア国の植物病理学・生理学研究所でJICA案件「植物ウイルス共同研究プロジェクト」を実施することになった。要員は国の研究者が主体だが協会も準公的機関であり、パ国の経験故か私に参加の依頼がきた。当面日

本側から3名の研究者と調整員1名でプロジェクトを開始した。必要に応じて国と都道府県の研究機関および大学から20余名の短期専門家の派遣を要請できた。



(写真)アルゼンチン植物病理学・生理学研究所(右端、筆者)

赴任した研究所は首都ブエノス・アイレスの北西700kmに位置するコルドバ州の州都コルドバ市にあって、気候は温暖で近隣の山は夏季の避暑地でもある。全農作物のウイルス病が研究対象ではあったが、主にトウモロコシ、トマト、大豆、ヒマワリのウイルス病に取り組んだ。プロジェクトの開始にあたって、JICAは新たにウイルス研究に必要な実験棟と必要資機材および調査用車両を研究所に供与した。30余名の所員の半数は女性、植物病理関係は15名で全員がC Pとなった。病害調査や試料採集のためには車で数百キロメートルを走るが、道路はよく整備されていて快適だった。

トウモロコシの(リオクワルト病)病原ウイルスはア国で見られてほぼ同定済みだが、PCR検査によるウイルス診断・同定やシーケンサーによる塩基配列の決定と媒介虫による伝搬試験に取り組んだ。トマトはパ国と同じく黄化えそ病(ア国ではペステネグラ病)が蔓延していた。日本で開発されたRISA法(迅速免疫ろ紙検定法)により、ア国内には3種の系統が地域別に分布していることが分かった。この結果とRIPA法をスペインを含めたラテンアメリカ植物病理学会(モンテヴィデオ)で発表して特別賞を受賞した。大豆のウイルス病は世界共通のもので、ウイルス別の発生状況と分布調査を完了した。ヒマワリのウイルスは新種として米国の専門誌に投稿し、共著者のC Pはマドリッド大学に招請された。調査と研究主体のプロジェクトで、C P達は皆優秀だった。所内では定期的に報告会やセミナーがあり、学会発表や投稿論文の作成にも追われて多忙ながらも充実した生活であった。強く要望されて3年間の予定が5年に及んだ。

3. ボリビア共和国(ボ国)： 帰国してまた元の研究所に戻り、本業の合間にア国での仕事の整理と学会発表や論文を作成した。ところが帰国前から既にパ国のア大学とボ国のJICA農業試験場(CETABOL)から名指しで派遣要請があった。ボ国には2か所の日系移住地があり、要請状ではそれらの圃場に発生する稲と小麦のいもち病、柑橘の潰瘍病およびマカダミアの急性立枯れ症対策等とあった。写真では広大な小麦畑一帯で穂が真っ白に退色していた。マカダミアの症状は原因不明らしい。パ国の状況はよく分かったのでア大の要請は断った。稲のいもち病は日本でも発生するが小麦では稀で、是非現場を見たかった。また、マカダミアの症状も原因不明で

これにも取り組んでみたく、大学の同期生がCETABOLの場長だったこともあって(1年後には本会のT氏に替った)ボ国へ行くことにした。なお、当時ボ国のJICA事務所長は当会のN理事であって、時々CETABOLへ来られた。広範で重篤な稲いもち病の発生原因は窒素肥料の過剰施用であった。小麦いもち病では小発生があったが、大発生は任期中には見なかった。柑橘潰瘍病は保菌苗木の(不法)持ち込みによるもので、日本の防除基準を適用して済ませた。ダイズうどんこ病の防除試験等も指導したが、マカダミアの病原菌探査に注力し、日本の栗に発生する黒根立枯れ病と同種の菌を検出・同定し、帰国後日本の学会で発表した。



(写真)CETABOL農場公開日 農牧大臣と永井事務所長

4. JICA筑波・イフパット

CETABOLから延長要請があったが定年が近く、元の職場に戻って新規農薬の評価試験検査役に就いた。協会研究所の退職時にJICA筑波(所長は当会のK理事)から研修指導者の募集があって採用され、植物病理学の講義と実習を担当した。その後イフパットに入会して現在に至る。



国際協力から、新たな道へ

イフパット会員 渡辺雅夫

昨年、2019年の4月、JICAを退職しました。

社会人採用で、2000年の11月1日にJICAに就職したので、19年半JICAで働かせていただいたことになります。

私にとってはJICAは7年ぶりの定職で、それまでの20代は、「生涯に亘ってやりたい仕事を見つけるための時間」でした。考えるだけでは始まらないので、片っ端からいろんな仕事を経験して、方位磁石の針を確かめるように少しずつ自分に合った進むべき方角を絞ってきたように思います。

そして、30歳で青年海外協力隊の村落開発普及員として、インドネシアの村に派遣され、生活用水の事業をやり遂げた時、まるで啓示が降りてきたように、「今まで自分が探していた仕事は、これだ!」という感触を得ました。

その勢いでJICAを受け採用されてからは、この仕事を選んだことに対する後悔は、ただの一度もありません。私にとっては天職だったと思います。

転機となったのは、2005年から2008年までのベトナム赴任と、2011年の東日本大震災、そして、その直後のJICA兵庫から国内事業部時代に至る経験でした。



(写真)インドネシア協力隊時代(1998年)生活用水事業をしている場面

2008年から強く意識し始めたことがあります。それは「自分の役割とはなにか?」ということでした。きっかけは、当時ベトナムの農業個別専門家だった狩俣茂雄さんです。ハノイのご自宅にお招きいただいた際に、NHK大河ドラマの「篤姫」の話になりました。井伊直弼が篤姫にお茶を点てるシーンで、篤姫が「安政の大獄を断行したことで天道に恥じることはないのか?」と詰問した際に、直弼が「恥じることはございません。私は、己れの役割を果たしたまで」と断言したのは素晴らしい、と狩俣さんがおっしゃるのです。そのときの狩俣さんがとても大きく見えて、「自分の役割を知り、その役割に殉ずる覚悟をしている人は迫力があるのだ」ということを悟りました。

それからは、社会における「自分の役割」を探し求めています。「やりたい仕事」を探していた20代とは、同じようでもまったく違います。

そして、東日本大震災が起こったのです。

その直後に神戸に赴任し、国内事業のミッションに携わり、被災現場にも行き、阪神淡路大震災の経験を持つ兵庫県の行政や民間団体とも、頻繁に意見を交わす機会にも恵まれました。

その時に次の2つのことを強く思いました。

「途上国にくらべて、日本の方が元気が無くて、自信を失っている」

「国際協力の経験は、国内においても役立つ」

ということです。

やがて、神戸から本部の国内事業部に異動になり、まもなく「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が政府で策定された時に、なにか運命的なものを感じました。

おそらくここに「自分の役割」があるのではないかと直感で思ったのです。

その後、事業構想大学院大学という夜間の大学院に通わせていただき、地方創生のための「事業構想計画」を作り上げました。

私の事業構想計画は「みちびと」と言い、日本の特定の地域にフォーカスするのではなく、日本の地域と地域を毛細血管のようにつないでいる「旧街道」に焦点を当てています。その道を歩く旅を推進することによって、地域のマイクロビジネスを盛り立て、

確実に地域にお金が落ちるしくみを作り、ついでに健康になりましょう、というプランです。お陰様で、視点がユニークで楽しそうということで、教授陣からは高く評価していただいたのですが、実践が伴わなければ画餅に帰すことになります。JICAの仕事も非常に楽しくやり甲斐があったので、正直迷いましたが、私より後の若い優秀な人材がおりますし、自分も新たなチャレンジを試みようと思ったこと、そして何より、「この作ったプランを進めて、日本を元気にすることが自分の役割だ」と納得できたことで、JICAを退職する決断をしました。

ホームページも作り、「さあ、これからだ!」と思った矢先、コロナ騒動になり、しばらく様子見をしてしまいました。しかしながら、意気消沈していても始まらないので、発信だけはしていこうと自分を奮い立たせています。

今はコロナ禍で、旅行ビジネスが苦境にさらされていますが、私が推進するのは「点の観光」ではなく「線の旅」であって、「個々人が街道を歩いてゆつくりと移動する」という過程そのものを楽しむ旅の原型です。「3密フリー」の旅でもあるので、「旧くて新しい旅のカタチ」として、今後発信を強化していきます。

今はまだコンテンツを入れていませんが、コンテンツがある程度揃い次第、ホームページをアップデートしていく予定です。

<https://michibito.com/>

また、あれこれ奔走していたら、日本ウォーキング協会からお声が掛かり、「みちびと紀行」というコーナーも担当させていただけることになりましたので、ここでも紀行文を発信しています。ぜひご覧ください。



(写真)東海道の三重県関宿

<http://michi100sen.jp/specialty/>

いつか、この事業によって甦った旧街道を、海外の人々が歩いて巡る旅が実現できれば、日本の国際協力の目指す先にあることにも貢献できるかもしれません。

そう願って、あちらこちらの街道を歩いています。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農林参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL: 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>